

六 世尊拈華

世尊、花を拈ず

世尊、昔、靈山会上に在って花を拈じて衆に示す。

是の時、衆皆な默念たり。惟だ迦葉尊者のみ破顔微笑す。

世尊云わく、

「吾に正法眼蔵、涅槃妙心、実相無相、微妙の法門有り。

不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付嘱す」。

無門曰く、

「黄面の瞿曇、傍若無人。良を庄して賤と為し、

羊頭を掲げて狗肉を売る。將に謂えり、多少の奇特と。

只だ当時大衆都て笑うが如きんば、正法眼蔵、作麼生か云えん。

設し迦葉をして笑わざらしめば、正法眼蔵、作麼生か云えん。

若し正法眼蔵に伝授有りと道わば、黄面の老子、閻闍を誑こ（呼の異体字）す。

若し伝授なしと道わば、甚麼としてか独り迦葉をゆるす」。

頌に曰く、

花を拈起し来って、尾巴已に露わる。

迦葉破顔、人天措く罔し。

六 世尊拈華

世尊、花を拈ねんず

釈迦牟尼世尊しゃかむにせそんが、昔、靈鷲山りょうじゆせんで説法された時、一本の花を持ち上げ

聴衆の前に示された。

すると、大衆は皆黙っているだけであつたが、唯ただ迦葉尊者かしょうだけは顔を崩してにっこりと微笑んだ。

そこで世尊は言われた、

「私には深く秘められた正しい真理を見る眼(正法眼蔵)、

説くに説くことのできぬ覺りの心(涅槃妙心)、

その姿が無相であるゆえに、

肉眼では見ることのできないような(実相無相)

不可思議な真実在というものがある(微妙法門)。

それを言葉や文字にせず(不立文字)、

教えとしてではなく、別の伝え方で(教外別伝)

摩訶迦葉にゆだねよう」。

無門は言う、

「金色のお釈迦様もなんと独りよがりなものだ。

善良な人間を連れ出して奴隷にするかと思えば、

羊の肉だなどと偽って狗(犬)の肉を売りつけなさる。

とても並みの人間に出来る芸とは言えぬ。

だがしかし、もしもあの時その場の大衆が皆な一斉に微笑んだとしたら、

正法眼蔵とやらいう結構なものをどのように伝えたであろうか。

また逆に、迦葉尊者を微笑ませ得なかったとしたら、

それをどのようにして伝えたであろうか。

そもそも正法眼蔵というようなものが伝達できるとすれば、

お釈迦様は一般大衆を誑たぶらかしたことになる。

また伝達出来るものでないとすれば、

どうして迦葉尊者だけに伝授を許されたのであろうか」。

頷うなって言う、

花などひねって、

尻尾丸出し。

迦葉かしやうの笑顔にや、

手も出せはせぬ。